美歴だより

Isahaya
Museum of
Art & History
Museum News
Vol.7

CONTENTS

諫早市美術・歴史館だより

館長のつぶやき 2
関係者以外立入禁止 3
民具の部屋 4
いさはやの歴史 5
美術の時間 6
美歴 hand made club 7
お知らせ 8

ひとつの歴史に幕　諫早の木造駅舎
（写真左上は昭和40年代の諫早駅）

Kancho no tsubuyaki

館長のつぶやき

見落とした中に宝がある

民俗学者の宮本常一先生は、口癖のように「うっかり見落としてしまった中に、意外にも大事なものがあるものだ。」と言われていたことを思い出す。調査などでも、基礎資料を事前に見ておくことは当然ながら、むしろ当事者にとって“別にどうってことも”といった他愛もないことの中に、意外なものを発見することがあるという。宮本先生の基本は、当たり前を当たり前と考えず、“どうしてだろう”と、一旦足を止めることであった。そして我々にもその大事さを教えてくれた。

先日、米田耕司長崎県美術館館長と話をする機会があった。ネアンデルタール人(旧人)と新人の文化感の相違とか黒沢明監督の表現観とこだわり、そして、岡山・大原美術館での＜命を救った絵画＞の話などをしてくださった。死を求めていた某男性が死ぬ前に大原美術館を訪ね、関根正二の『信仰の悲しみ』を見て、死ぬことをやめ、もう一度生きようと頑張ったという逸話である。米田館長は、一枚の絵がすごい力を持っているものだ、数の問題ではないという。自殺願望の男性が一枚の絵で救われたことは、偶然出会ったのかもしれないが、美術館に、絵画に“いのちの力”があることの証を改めて教えてくれた。

さて、6月の「館長講座」は、＜諫早に何でこんなにえびすさんがいるの！＞と題して話をさせていただいた。地元の方々にとっては、今更えびすさんを俎上に載せても関心は薄いかと思ったが、多くの方が聞きに来てくれた。成程とかそうなんだといった感想に加え、キリシタンとの関係を質問してくる方もいた。普段見慣れたものでも、真面目にというか、斜に構えて眺めてみると、意外な発見が得られるものであることを改めて知った。

（挿入のえびすさんは、有喜地区・ご大典記念像の横に設置）

これからも見落としを見落とさないように宝を探したい。そういえば、来年2017年は諫早生まれの我が国に活版印刷技術をもたらしたコンスタンチノ・ドラードが生誕して450年だ。忘れないようにしておかねば。

（館長・鈴木勇次）

季刊

関係者以外立入禁止

Staff Only

その2

「展示替えにはワケがある…？」

関係者以外見ることができないもの、それが「展示替え」。年３回の展示替えには大きく３つのワケがあって…。

①展示のマンネリ化を防ぎ、新しい資料を見ていただく。

②照明や温湿度の変化は資料にストレスがかかるので、長期の展示を避ける。

③資料の状態を確認する良い機会。傷みがないかチェックできる。

資料入れ替えのリストを作成して、新たに展示する資料が収蔵庫のどこにあるかを確認して、解説パネルを準備して…。作業は「休館日１日で完了する」のがミッション。ではあるけど、資料＝市民の財産。取り扱いには細心の注意を要します。特に陶磁器を扱う時には心拍数が…。掛軸を巻くにもコツが要ります。

どう配置したら見やすいか？どう照明をあてれば美しく見せられるか？学芸員の腕（腕力も？）とセンスが試されます。

日が沈むころには明日からのお客様を迎える準備完了。展示替えは学芸員にとっての「盆と正月」みたいな年中行事です。

「私たちには時間が無いのよ！！」

（キャンディーズの名セリフ…）

（川瀬雄一）

むかしの道具とひとのちえ

たとえば、「衣類」のおハナシ。

きもの・かぶりもの・はきもの

江戸時代末ごろから昭和30年代あたりまで、諫早で着用していた衣類を紹介します。

PICKUP

花嫁着物

広袖で裏に赤の生地を配した長着物です。現在の打掛のような華やかさはありませんが、普段では身に着けない色、つくりは格式をかもしだしています。自給自足の時代、着物も自分で布を織り、着物に仕立てていました。その中でこうした花嫁着物は特別で、仕立ててもらったものでした。

PICKUP

どんざ

刺し子着物で、農家では丈の短いどんざを着用しますが、これは漁師が着用していた長どんざです。袷を木綿糸で1㎝間隔に刺してあります。刺すことで布が強くなり、雨風を通しません。海の上での波や風除けに適していました。また、傘が出回っていなかった昭和10年代までは雨の日に子供がどんざを頭から被って登校していました 。

PICKUP

ももひき

男性が着る下衣です。山仕事や遠出のときなどに着用していました。着る人の身体にあわせて作ったものです。このため細かく部分を分けた布を継ぎ合わせて仕立てています。藍染は虫よけや細菌を抑える効果があり、樹木や植物、土にまじわる場面が多い山での作業に適していました。

PICKUP

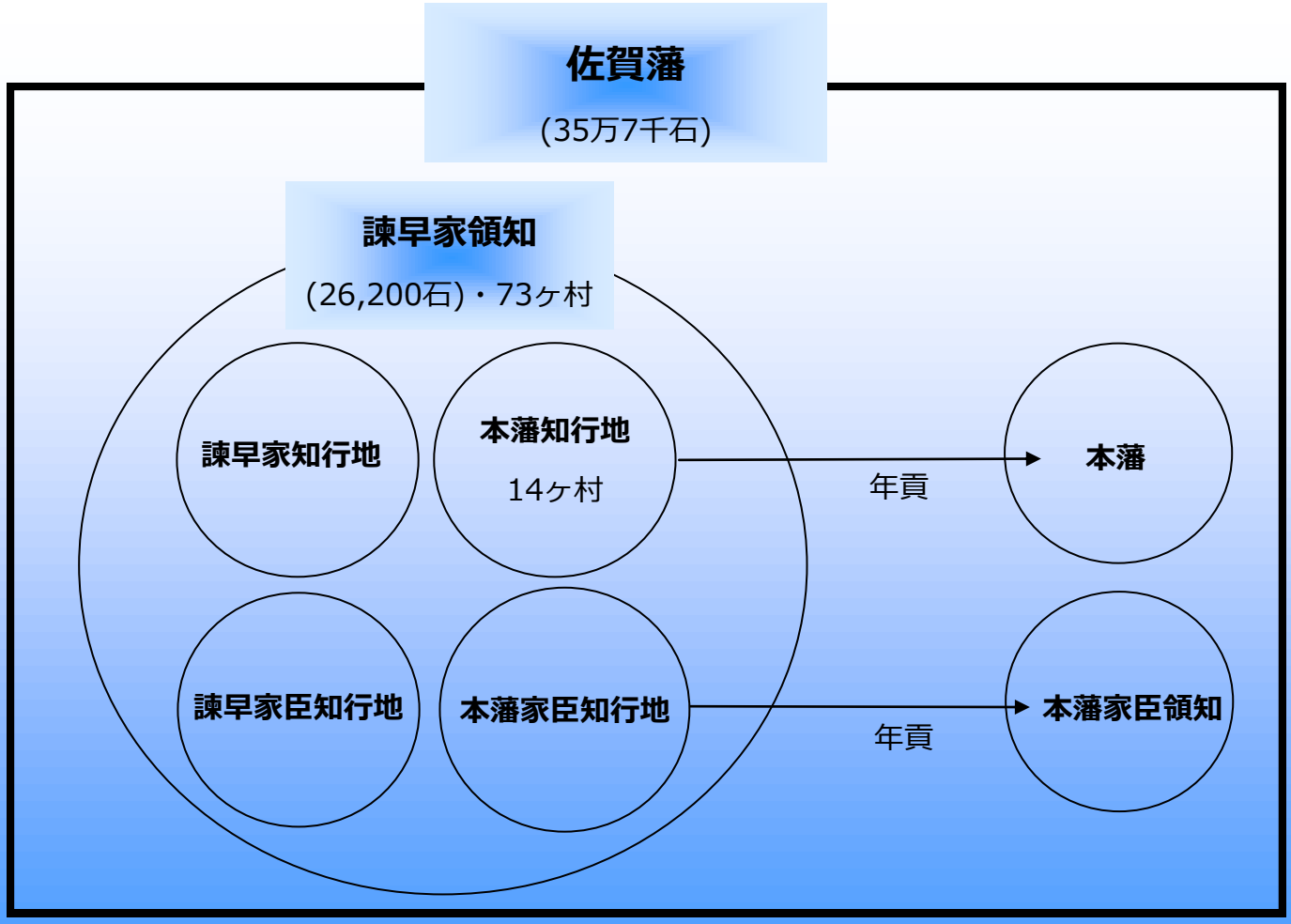
わらじ

稲藁で作った履物です。山仕事や遠出をして一日中はいているというときの履物です。草鞋掛けと呼ぶ足袋を履いたうえから着装していました。

（川内知子）

佐賀藩諫早領の石高と知行地

佐賀藩の石高35万7千石は、本藩(藩主領知)と各家臣の知行地(領知)を合わせた石高です。諫早家の石高は26,200石・物成(年貢)10,480石、藩内で4番目の石高です。佐賀藩は本藩の統一支配ではなく、領知を持った各家臣はある程度の自治が認められていました。因みに、諫早領の石高は隣の大村藩の石高27,793石とほぼ変わりません。江戸時代、諫早領内には73ヶ村ありましたが、慶長16年(1611)・元和7年(1621)の2度にわたる三部上知(三割程度の土地を貸与)により、73ヶ村の内14ヶ村が本藩知行地(御蔵入村)となりました。それらの村々は西長田・小豆崎・福田・大渡野・栄田・真崎・小船越・貝津・平山・栗面・小川・川床・有喜・土師野尾村です。また、深海・中山・鷺崎・早見・八町分・小豆崎村は深堀家や本藩家臣の知行地がありました。これらを簡単に説明したのが下の図です。



（大島大輔）

Art of Time

美術の時間

外海町大野教会
野口典男
Size　31.8×41.0㎝
Date　1996年
Medium　油彩　キャンバス

野口典男[1937−2009（昭和12−平成21）年］は諫早市天満町出身の洋画家です。諫早高校時代の同級生には野呂邦暢、田中道太郎がいました。上京後、1977（昭和52）年に銀座明治画廊で初個展を開催しました。1979（昭和54）年には銀座スルガ台画廊で新人選抜個展のレスポワール展を行い、その後もスルガ台画廊や檜画廊で展示をしています。諫早では1996（平成8）年アトリエ向井で初個展を行い、2008（平成20）年には長崎歴史文化博物館で『絵画で見る長崎の教会展』を開催しています。初期は静物画を主に描いていましたが、諫早湾や長崎の天主堂などの風景画も多数描きました。この作品は天主堂作品群の一つで、外海町の大野教会を描いています。パネルの裏面には本人のメモが残っていますので、下記に紹介します。

—フランスの神父ド･ロ神父が明治26年に建設。地元産の石と粘土を混ぜて作ってあるこの壁をド･ロ壁と呼ばれている。窓はアーチをなし赤レンガでつくられ教会の香りを感じさせる。1995年11月長崎よりバスで外海町へ行きバス停より山へ向って登ぼること十分、山里に相応しい畑の上に石垣と共にその教会が見えた。眼下には外海キリシタンが移住逃散した五島列島が眺望でき、夕日のきれいな角力灘が広がっている。教会の入口には100年記念として白色のマリア像がやさしく手をさしのべていた。100年前のことを想像するにあまりに自然と人達が変化の中で、陸のこ島といわれたこの地の美しい自然の中で密やかに精神を養っていたのであろう。確かにこの地は信仰の地にふさわしく日本人枢機卿が二人生まれている。教会を去る時には角力灘に夕日がまぶしかった。静かな日であった。　1996年4月　野口典男（原文）—

（百﨑恭子）

■ 美歴 hand made club ■

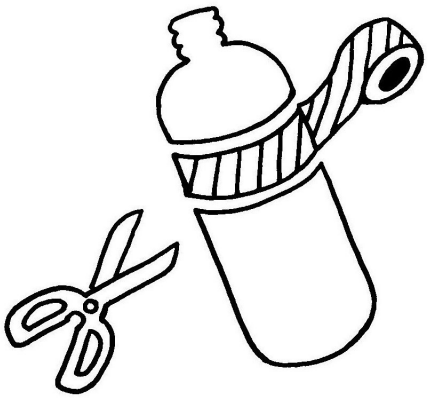
#2　ペットボトルバングル

■材料：ペットボトル（大人は900m１サイズ）、マニキュア、アクリル絵の具など
■道具：アイロン、ハサミ、マスキングテープ（aは18mm、 bとcは12mm幅）、手袋

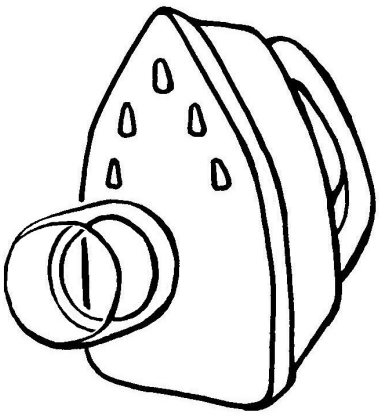
アイロンを使うときには火傷をしないように手袋をしましょう。
ケガの原因になるので割れたり、ヒビの入ったものは身に着けないようにしましょう。

■作り方：

①ペットボトルを作りたい太さの幅に切る。（テープを巻いてテープに沿って切るとまっすぐに切れる）

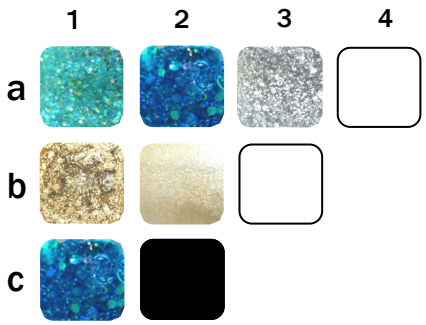


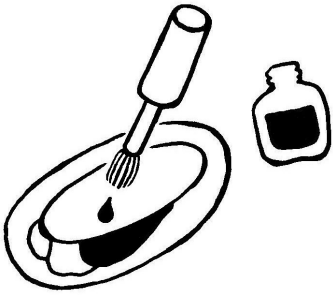
②切ったペットボトルの両方のフチをアイロン（中温）に当て丸くする。



③内側にマニキュアなどで好きな模様を描いて乾いたら完成。

※見本と同じ様に作る場合は下の色のマニキュアを左順から塗っていく。





（田中郁子）

お知らせ

発行日：平成28年7月

館企画展

きもの・かぶりもの・はきもの展

期　間／6月29日（水）～7月31日（日）
午前10時～午後7時※最終入場18:30
会　場／美術・歴史館[2階企画展示室]
観覧料／無料

諫早大水害の記憶展

期　間／7月1日（金）～7月27日（水）
午前10時～午後7時※最終入場18:30
会　場／美術・歴史館[1階ホール]
観覧料／無料

野口典男さんの作品　諫早市へ

5月9日、天満町出身の野口典男さんが描いた絵画作品40点が諫早市へ寄贈されました。

風景や静物の絵が得意だったという野口さん。晩年は主に長崎の教会を題材にした作品を製作されました。美術・歴史館では、9月に「野口典男展」を開催する予定です。

館講座

◆　民俗講座　◆

と　き／7月17日（日）午後1時30分～3時30分
ところ／美術・歴史館[2階研修室ほか]
内　容／なぜ、人は衣服を着るのか。衣服の役割など
講　師／川内 知子（館専門員）
その他／受講料無料、事前申込不要

夏休みアート＆ヒストリー講座

①版画でうちわを作ろう
と　き／8月20日（土）午後2時～4時
定員／10人、参加費300円

②眼鏡橋のひみつを探ろう
と　き／8月20日（土）午前10時～正午
定員／30人、参加費無料

③アクセサリー作り
と　き／8月21日（日）午前10時～正午、午後2時～4時
定員／各回5人、参加費300円

④カメラガール☆ステキ写真術
と　き／8月21日（日）午後1時30分～4時30分
定員／10人、参加費無料

講　師／館職員外ほか
その他／要申込。詳しくは美術・歴史館HPを

－編集後記－

80年の歴史に幕が閉じました。
あの日、あの時、あのホームで・・・
思い起こせば、たくさんの出来事がありました。

古めかしく、
おしゃれで綺麗とはいえないけれど、
どこか懐かしく、
どこか温かみがあった諫早の木造駅舎。

出会いや別れ、笑いや涙、
この場所で、さまざまなドラマがあったことだと
思われます。

今回、美術・歴史館の仕事で、
ひとつの時代の役目を終えた『駅舎』の
撮影を行いました。

諫早の歴史の「記録」として、
思い出の「記憶」とともに
大切にしまっておこうと思っています。

しみじみ、しみじみ・・・

（山本貢）

美歴だより　Vol.7
編集・発行／諫早市美術・歴史館　〒854-0014　長崎県諫早市東小路町2-33　TEL:0957-24-6611　FAX:0957-24-6633